

教員を目指す学生は色覚特性について学ぶ機会があるか（2）

教員養成における色覚特性についての指導の実態と課題

○加部清子

（筑波大学附属大塚特別支援学校）

KEY WORDS: 色覚特性 大学 教員養成

【目的】

人間の色覚には多様性があり、その少数派（ここでは「色覚特性」とする）の人は、日本人男性の約 5% いると言われている。男子が 20 名いる学級では 1 名在籍している可能性があり、発達障害と同様、無視することのできない割合である。2003（平成 15）年度から学校での色覚検査が健康診断の必須項目から削除されたため、教員は、色覚に特性のある者を把握しづらくなったと考えられる。しかし、色覚に特性のある者が一定数在籍している可能性があることを考えれば、たとえ誰が当事者なのか分からなくても、誰にとっても分かりやすい色使いの配慮、すなわちカラーユニバーサルデザインを導入していく必要がある。そのために教員は、色覚特性や適切な配慮のための知識をもつ必要があり、教員養成の段階でしっかり学ぶ必要があると長年主張されてきた（楠本ら 1996）（堂腰ら 1998）（堂腰ら 2002）（楠本 2016）。加部（2020）は、教員養成を行う大学で色覚特性やその配慮について授業で扱っているのかを明らかにするため、国立の教員養成系大学のシラバス（授業計画）を基に、色覚特性やその配慮について扱う機会の実態を調査した。その結果、教員養成系の授業で「色覚」を扱うとシラバスに明記している大学は全体の 3 分の 1 と少なく、十分とは言えないと考察した。また、「色覚」を扱う授業は養護教諭の養成課程や特別支援教育の専門科目であることが多かった。色覚特性に対する配慮は日常的に子どもに接し授業を行う教員が行う必要があり、通常の学校の教員を目指す学生にも色覚特性やその配慮について学習する機会を与える必要があると結論づけた。

大学通信(2020)の小学校教諭就職者数ランキングによれば、小学校教諭には私立大学出身者も多数いる。そこで本研究では、国立の教員養成系大学の他、小学校教諭の養成を行っている私立大学を対象に、色覚特性やその配慮について教える機会の実態を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究は各大学ホームページで一般に公開されたシラバスを調査対象とし、結果に個人情報等を含まない。

【方法】

①国立の教員養成系大学 44 校を対象に、大学ホームページで閲覧できる教員養成学部の 2021 年度シラバスから、「色覚」でヒットした大学数を調べた。また、ヒットした授業について、内容や受講対象を調べた（最終検索日 2021.5.5）。

②文部科学省(2019)より、小学校の教員養成を行っている私立の 4 年制大学 191 校を対象に、大学ホームページで閲覧できる該当学部学科の 2021 年度シラバスから、「色覚」をキーワードに検索を行い、1 件でもヒットした大学数を調べた。ヒット数の比較のため、「発達障害」、「学習障害」（発達障害の下位項目として）も同様に検索した（最終検索日 2021.5.9）。

【結果】

①シラバスのワード検索ができた 33 校を分析対象とした。「色覚」でヒットした大学は 11 校（33%）であり、授業の総数（科目の読み替え等で同じ授業と判断できるものは 1 件とみなした）は 19 件であった。そのうちの 7 件は養

護教諭養成課程の、5 件は特別支援教育の専門科目であり、その他、図工・美術系、理科系、情報・ICT 系、共通科目などであった。

②シラバスのワード検索ができた大学 128 校を分析対象とした。対象のキーワードで 1 件でもヒットした大学数は図 1 の通りである。

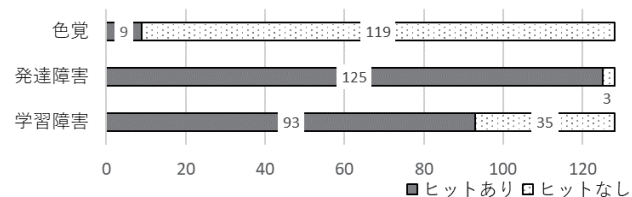


図 1 ヒットした大学数

【考察】

国立の教員養成系大学の教員養成学部で、「色覚」を扱うとシラバスに明記している大学は 33% にあたる 11 校であった。2020 年度、2021 年度のいずれの年でもシラバス検索ができた 31 校中、いずれの年でもヒットしたのは 9 校で、ヒットする大学が固定していることが読み取れた。授業内容は養護教諭の養成課程や特別支援教育の専門科目であることが多く、大学数、内容とも 2020 年度調査とほぼ同様であった。

小学校の教員養成を行っている 4 年制私立大学のうち、該当学部学科の授業で「色覚」を扱うとシラバスに明記している大学は 7% にあたる 9 校であり、発達障害の下位項目である「学習障害」と比較しても 10 分の 1 程度と少なかった。ヒットした大学の多くは、小学校に加えて特別支援学校の教員免許も取得でき、「色覚」は特別支援教育の専門科目として扱われることが 8 割近かった。

本調査はシラバス内のワード検索にすぎないので、実際には、ヒットしなかった授業では色覚特性やその配慮について全く教えていないというわけではないかもしれない。しかし、教員を目指す全ての学生に学ぶ機会が与えられているとは言えないだろう。繰り返しになるが、色覚に特性のある者は一定数在籍しているはずで、決して珍しくはない。発達障害と同様、教員を目指す全ての学生が色覚特性やその配慮についての知識を得られるよう、教職の必修科目の中で扱うべきである。また、採用後も研修や免許更新講習などで、折に触れて学べる機会が必要である。

【文献】・加部(2020)日本特殊教育学会第 58 回大会 P1-4

・楠本ら(1996)大阪教育大学紀要第 V 部門 44(2),261-272

・楠本(2016)四天王寺大学紀要 61,141-155

・大学通信(2020) :

<https://univ-online.com/rank1/y2020/teachers/r1910059/>（最終検索日 2021.5.5）

・堂腰ら(1998)学校保健研究 40,457-473

・堂腰ら(2002)学校保健研究 44,317-327

・文部科学省(2019) :

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2019/03/29/1287044_1.pdf（最終検索日 2021.5.1）

(KABE Kiyoko)